

〔原 著〕

## 作業療法学専攻学生のコミュニケーション・スキルにおける学年間の差

千葉さおり<sup>1)</sup>、佐藤 彰博<sup>1)</sup>、浅田 一彦<sup>2)</sup>

### 要 旨

コミュニケーション・スキルは経験とともに向上することから、演習や実習を多く経験している3・4年生は、1・2年生よりもコミュニケーション・スキルが高いという仮説を立てて検証した。対象は、作業療法学専攻1～4年生164名とし、コミュニケーション・スキル尺度ENDCORsを用いて評価した。評価時の臨床実習経験は1年生と2年生は未経験、3年生は評価実習2回、4年生は評価実習と総合臨床実習の計4回経験している。調査の有効回答は94.5%（164名中155名）で、学年間の比較の結果「共感性」と「柔軟性」が1年生に比べて3年生が低く、「関係維持」「管理系スキル」「対人スキル」が1年生に比べて4年生が有意に低かった。臨床実習では、相手を理解し、受け入れながらも治療者として立案したプログラムを実施してもらえるように説明を行わなければならない。しかし、患者は年齢も立場も異なり、精神的・身体的状態は様々である。学生がこれまで接する機会の少なかった相手とのコミュニケーションにおいて、自身のスキルの未熟さを実感したため実習を経験した学年において自己評価が低くなったと推察された。これらのことから、臨床で求められるコミュニケーション・スキルと学内環境で自身が認識しているスキルとの間には大きなずれが生じている可能性が示唆された。

キーワード：コミュニケーション・スキル、学生、臨床実習

### I. はじめに

作業療法は、患者との相互的な信頼関係によって行われることから、作業療法士は患者から信頼と協力を得る努力をしなければならない<sup>1)</sup>。対人関係においてコミュニケーションは必要不可欠であり<sup>2)</sup>、作業療法士にとってコミュニケーション・スキルは、専門的な知識や技術以上に欠かすことのできない能力である<sup>3,4)</sup>。しかし、養成課程において避けて通ることのできない臨床実習では、指導者や患者とのコミュニケーションにつまずく学生が増えている<sup>5-7)</sup>。これらの問題は、養成校に限ったことではなく、コミュニケーションを含めた社会的スキルの向上が大学に課せられている<sup>8)</sup>。

倉元ら<sup>9)</sup>は、一般大学生のコミュニケーション・スキルについて、就活などで社会とのつながりが増える3年生以上は1・2年生に比べてコミュニケーション・スキルが高くなると報告している。また、金山ら<sup>10)</sup>は、作業療法士として経験年数が増えることで、社会的スキルが向上すると報告している。このことから、実習や演

習など経験が増える3・4年生は、1・2年に比べてコミュニケーション・スキルが高いという仮説を立てた。

しかし、先行研究の多くは一般大学生や看護学生を対象にしたものがほとんどであり、作業療法士や言語聴覚士などのリハビリテーション職種に関する報告は少ない。また、評価は独自に開発した質問紙を用いた報告が多く、一般化して用いることが難しい。

そこで、本研究では標準化された質問紙を用いて、作業療法学専攻学生の学年間におけるコミュニケーション・スキルの差を明らかにすることを目的とした。

### II. 研究方法

#### 1. 対象

本学作業療法学専攻に在籍する1年生～4年生164名を対象とした。対象者の背景として、1・2年生は臨床実習未経験である。3年生は、3年次後期の評価実習(4週間)を2回経験しており、4年生は3年次後期の評価実習(4週間)2回と4年次前期の総合臨床実習(7週間)

1) 弘前医療福祉大学 医療技術学科 作業療法学専攻 (〒036-8102 青森県弘前市小比内 3-18-1)

2) 弘前医療福祉大学 医療技術学科 言語聴覚学専攻

を2回の計4回の臨床実習を経験している。

## 2. 調査項目

基本属性として、年齢、性別、学年を調査した。コミュニケーション・スキルの評価には、藤本・大坊ら<sup>11)</sup>が作成したコミュニケーション・スキル尺度ENDCOREsを用いた。コミュニケーション・スキル尺度ENDCOREsは、コミュニケーションに必要なスキルに対する得意・不得意を7件法にて回答する自己記入式の質問紙である。尺度は、「自己統制」、「表現力」、「解読力」、「自己主張」、「他者受容」、「関係調整」の6つの下位尺度から構成され、各下位尺度は4項目のサブスキルで構成される。また、6つの下位尺度のうち「自己統制」、「他者受容」は反応系スキル、「表現力」と「自己主張」は表出系スキル、「自己統制」、「関係調整」は管理系スキルに分類される。また、上位尺度として、基本スキル（自己統制、表現力、解読力）と対人スキル（自己主張、他者受容、関係調整）の2階層に分かれている。

## 3. 実施手順

本研究の趣旨と対象となる学生の権利を記した文書、評価用紙、同意書を作成した。調査は各学年の学生に対して、研究代表者が文書を一斉配布し、本研究の趣旨、研究協力に対する任意性と権利、評価の実施方法について文書と口頭で説明を行った。そして、本研究に同意が得られる場合には、同意書への署名と評価用紙への記入を行ってもらい一斉に回収した。

## 4. 調査期間

平成27年11月から平成28年1月にデータの収集を行った。

## 5. 統計学的検討

コミュニケーション・スキル尺度ENDCOREsの基本スキル、対人スキルの上位尺度、表出系、反応系、管理系の3つの分類、6つの下位尺度、各下位尺度のサブスキル、全項目得点について多重比較（Steel-Dwass法）を用いて学年間の比較を行った。解析ソフトは、EZR Ver.1.30を使用し、有意水準は5%とした。

## Ⅲ. 倫理的配慮

研究への参加に同意の得られる場合のみ質問紙への回答を行ってもらい任意性を確保した。対象者が学生であることから、研究への参加が得られない場合でも、学内の成績には一切影響しないことを口頭と文書にて十分に説明を行った。なお、本研究は弘前医療福祉大学倫理委

員会の承認を得て実施された（受付番号71）。

## Ⅳ. 結果

有効回答数は、94.5%（164名中155名）で、男性72名、女性83名、平均年齢 $20.9 \pm 3.3$ 歳（18～44歳）であった。内訳を表1に示した。

各学年におけるコミュニケーション・スキル尺度ENDCOREsの得点は表2の通りであった。学年間の比較では、「柔軟性」と「共感性」において3年生が1年生よりも有意に低かった（ $p=0.037$ 、 $p=0.020$ ）。また、サブスキルの「関係維持」は、4年生が1年生よりも有意に低かった（ $p=0.040$ ）。「管理系スキル」、「対人スキル」についても4年生が1年生よりも有意に低かった（ $p=0.016$ 、 $p=0.016$ ）。有意でなかった項目についても、1年生の方が上級生よりも得点が高かった。

## Ⅴ. 考察

### 1. コミュニケーション・スキルの学年間の比較

コミュニケーション・スキルは社会経験の多さが関連することから、演習や臨床実習などが増える3・4年生は、1・2年生よりもスキルが高いと仮説を立てた。しかし、「柔軟性」「共感性」において3年生が1年生よりも自己評価は低かった。「柔軟性」は、納得してもらうために相手に柔軟に対応するスキルであり、「共感性」は、相手の立場や意見に共感するスキルである。また、「関係維持」「対人スキル」「管理系スキル」については4年生が1年生より有意に低く、仮説に反する結果となった。「関係維持」は、相手との人間関係を良好に維持するように心がけるスキルである。「管理系スキル」は、「自己統制」と「関係調整」から構成されるスキルであり、相手との関係性を良好にするために、自身の関わりをコントロールするスキルである。上位尺度である「対人スキル」は、相手を受け入れ、反応を読み取りながら自らも発信をし、その作業の中で相手との関係を良好に保とうとするスキルである。これらのスキルは、いずれ

表1 対象者の内訳

学年	年齢（歳）				性別（人）	
	平均	SD	95%CI		男性	女性
			下限	上限		
1年生	19.0	0.5	18.8	19.2	16	21
2年生	20.5	3.1	19.5	21.5	20	21
3年生	21.9	3.7	20.7	23.0	21	22
4年生	22.3	3.4	21.1	23.5	25	19

\*SD : Standard deviation  
CI : Confidence interval

表2 各学年のENDCOREsの得点

下位尺度		1年生	2年生	3年生	4年生
自己統制	欲求抑制	4.8(1.3)	4.9(1.2)	4.5(1.2)	4.3(1.4)
	感情抑制	5.0(1.4)	4.8(1.3)	4.4(1.4)	4.2(1.2)
	道徳観念	5.2(1.4)	5.2(1.1)	5.0(1.0)	4.9(1.2)
	期待応諾	4.3(1.2)	4.4(1.3)	3.7(1.1)	3.9(1.0)
表現力	言語表現	3.6(1.5)	3.7(1.6)	3.4(1.2)	3.1(1.4)
	身体表現	4.6(1.7)	4.1(1.4)	4.2(1.4)	4.0(1.4)
	表情表現	4.5(1.6)	4.4(1.3)	4.7(1.2)	4.6(1.2)
	情緒伝達	4.1(1.5)	4.1(1.3)	4.3(1.2)	3.8(1.2)
解読力	言語理解	4.7(1.2)	4.8(1.1)	4.5(1.3)	4.6(1.3)
	身体理解	5.0(1.2)	5.0(0.9)	4.7(1.0)	4.7(1.3)
	表情理解	5.1(1.2)	5.2(1.0)	5.0(1.0)	4.9(1.3)
	情緒感受	5.1(1.4)	5.1(1.2)	5.0(1.1)	4.9(1.4)
自己主張	支配性	4.0(1.6)	3.6(1.3)	3.7(1.0)	3.4(1.6)
	独立性	4.6(1.5)	3.8(1.1)	3.9(1.0)	3.9(1.6)
	柔軟性	4.7(1.3)	4.1(1.5)	4.0(1.0)	4.0(1.4)
	論理性	4.1(1.5)	3.6(1.5)	3.4(1.2)	3.3(1.6)
他者受容	共感性	5.8(0.9)	5.4(0.8)	5.1(0.9)	5.4(0.9)
	友好性	5.8(1.0)	5.3(1.2)	5.3(1.0)	5.4(1.0)
	譲歩	5.7(1.1)	5.3(0.9)	5.2(1.0)	5.3(1.1)
	他者尊重	5.8(0.9)	5.4(0.9)	5.3(1.0)	5.3(0.9)
関係調整	関係重視	5.6(1.0)	5.0(1.2)	5.2(1.3)	5.3(1.0)
	関係維持	5.9(0.9)	5.3(1.3)	5.4(1.2)	5.3(0.8)
	意見対立対処	5.1(1.1)	4.6(1.1)	4.6(1.2)	4.4(1.3)
	感情対立対処	4.9(1.2)	4.3(1.1)	4.7(1.1)	4.1(1.4)
下位尺度	自己統制	4.9(0.8)	4.9(0.9)	4.4(0.9)	4.4(1.0)
	表現力	4.2(1.3)	4.1(1.0)	4.2(1.0)	3.9(1.1)
	解読力	5.0(1.0)	5.0(0.9)	4.8(0.9)	4.8(1.3)
	自己主張	4.4(1.1)	3.8(1.1)	3.8(0.8)	3.7(1.3)
	他者受容	5.8(0.8)	5.4(0.8)	5.3(0.8)	5.4(0.8)
	関係調整	5.4(0.9)	4.8(0.8)	5.0(1.0)	4.8(0.9)
全国項目得点		4.9(0.8)	4.6(0.6)	4.5(0.7)	4.4(0.8)
上位尺度	基本スキル	4.7(0.9)	4.7(0.8)	4.4(0.8)	4.3(0.9)
	対人スキル	5.2(0.8)	4.6(0.7)	4.7(0.7)	4.6(0.8)
3系統	表出系スキル	8.6(2.1)	7.9(1.9)	7.9(1.6)	7.6(2.2)
	反応系スキル	10.8(1.7)	10.4(1.4)	10.1(1.5)	10.1(1.8)
	管理系スキル	10.3(1.4)	9.7(1.5)	9.4(1.6)	9.1(1.7)

平均(標準偏差) \* $p < 0.05$

も相手との関係構築のために必要なスキルであり、臨床実習において非常に重要なスキルである。

安田ら<sup>12)</sup>は、実習前はコミュニケーションについての不安が大きく、実習後は患者の対応に関する自己評価が低くなると報告している。また、学生が実習で抱く対人葛藤には、報告・連絡・相談が遅れたり、話しかけられず課題が残るなど、指導者に対する学生の不適切な行動や態度に関するものがあるとされる<sup>5)</sup>。このように臨床実習においては、患者や指導者に対するコミュニケーションが不安要素であることが明らかとなっている。3年次の評価実習では、対象者の全体像を把握した上で適切な目標を設定することが目的となるため、相手の状況や思いを理解するスキルが必要となる。また、4年次の総合実習では、自らが立案した治療計画に沿って訓練を実施することになる。訓練を実際に行うのは患者であり、学生は治療者として患者が理解できるように説明や指導を行わなければならない。したがって、4年次の実習では、相手の反応を確認しながら自分の関わりを調整するスキルが必要とされる。

しかし、一般的に大学生は、初対面の人や目上の人で中長期的に関係をもつことが予測される相手とのコミュニケーションが苦手であるとされている<sup>13, 14)</sup>。その理由には、話しかけるべきか否か迷う、話題が見つからないなどの接し方に関しての不安があるという<sup>13)</sup>。落合<sup>16)</sup>は、大学生の友人関係は全面的というよりも選択的で限定的な関係であると述べている。実習のない1・2年生が家族や友人以外に接する機会のある相手は、教員やアルバイト先の同僚や上司などであり、その機会も社会人に比べて決して多いものではないと予測される。しかし、臨床実習では、学生が苦手と感じている可能性が高い相手と4週間から7週間という長期的な関わりをもちながら作業療法を実施しなければならない。宮本ら<sup>16)</sup>は、臨床実習は知識や技術、コミュニケーション・スキルなど自身の問題点に気づく機会になっており、学生の成長感につながっていると報告している。他にも実習や演習後では、自己のスキルを客観的に捉えることで自己評価が下がるという報告が散見される<sup>17, 18)</sup>。このように、関わる相手や頻度など学内と大きく異なる状況において、自分が思っているほど、実際はうまくできないことで、自身のスキルに対する自己評価が低くなったものと推察される。

今回、臨床実習を経験した学年の方が自己評価は低くなっていたことから、実習経験がコミュニケーション・スキルに対する自己認識に影響している可能性が示唆された。そして、臨床で求められるコミュニケーション・スキルと学内環境において、自身が認識しているスキルとの間に大きなずれが生じている可能性も示された。

## 2. 今後の対策

学内環境と臨床実習で求められるコミュニケーション・スキルのずれを少しでも埋めていくことが必要である。コミュニケーション・スキルのトレーニングについて大坊は<sup>19)</sup>、第三者からどんなに指摘しても、本人が気づかなければ効果は希薄であると述べている。また、自己認知だけでなく、実践の中で気づき改善していくことが望ましいとしている。そして、サブスキルに合わせたトレーニングを行うことが重要であるとしている<sup>20, 21)</sup>。そのため、実際の評価場面を想定した模擬演習を通して、オリエンテーション方法や誘導のための声かけなど、患者役からどんな印象を受けたかフィードバックしてもらい、修正を加えていくことが有用かもしれない。専門的知識を学習していない1・2年生に対しては、普段の学内生活において学生の不適切な行動に対して、受け取る側の思いや望まれる行動について考え、実践させていく必要がある。そうすることで自身のコミュニケーション・スキルの認識を促すことができ、さらに言葉遣いや表情、動作も含めた具体的なアドバイスを実践することで効果的にスキルを身に付けることができるかもしれない。

## VI. 本研究の限界と今後の展望

本研究は横断的研究であり、同一対象者の経時的な変化については明らかにできていない。今回は学年間で比較しているため、実習の有無以外にも年齢などが影響している可能性もある。また、本調査はあくまでも自己評価の結果である。したがって、今後は縦断的な調査と他者評価も取り入れ、学生のコミュニケーション・スキルの実態と自己認識について更に検討していく必要がある。

## VII. 結語

1. 本学作業療法学専攻学生1年生から4年生を対象にコミュニケーション・スキルの比較を行った。その結果、1年生に比べて3・4年生が人間関係を構築するためのスキルが有意に低かった。
2. 3・4年生は臨床実習を経験している。臨床実習で必要となる人間関係の構築について、思うようにできないことを感じたため、自己評価が低くなったと推察された。
3. 日頃の学内生活や演習などを通じて、早期から第三者によるフィードバックとそれを受けての改善を実践していくことが、効果的なスキルの獲得につながるかもしれない。

## VIII. 謝辞

本研究を行うにあたり、ご協力を賜りました本学医療技術学科作業療法学専攻の1年生から4年生の皆様により感謝申し上げます。

(受理日 平成29年1月17日)

## IX. 引用文献

- 1) 作業療法士の職業倫理指針. 一般社団法人 日本作業療法士協会. 2005. (<http://www.jaot.or.jp/wp-content/uploads/2010/08/shokugyorinrinishin.pdf> 最終閲覧:平成28年10月26日)
- 2) 大坊郁夫:対人コミュニケーションの社会性. 対人社会心理学研究 第1号:1-16. 2001.
- 3) 大瀧 誠, 梶田博之 他:作業療法学専攻学生が卒業時点で獲得している能力. 神戸学院総合リハビリテーション研究 第2巻 第1号:49-58. 2007.
- 4) 齊藤秀之, 飯島弥生:学生・新人指導に関連する接遇・コミュニケーションスキル. PTジャーナル 第45巻 第7号:597-602. 2011.
- 5) 勅使河原麻衣, 渥美恵美 他:臨床実習における作業療法学生の対人葛藤:指導者との葛藤場面の分類. リハビリテーション教育研究 第13号:83-87. 2008.
- 6) 北山 淳, 長倉寿子 他:学生の臨床実習におけるコミュニケーション能力について—表情識別課題からの分析—. リハビリテーション教育研究:33-35. 2008.
- 7) 堀 秀昭, 福谷 保 他:学外実習における不合格原因の検討. リハビリテーション教育研究 第13号:76-79. 2008.
- 8) 葛城浩一:学生のコミュニケーション能力に関する現状と課題. 香川大学教育研究 5:1-5. 2008.
- 9) 倉元俊輝, 大坊郁夫:大学生のコミュニケーション・スキルの特徴に関する研究:ENDCOREsを用いた検討. 対人社会心理学研究 No.12:149-156. 2012.
- 10) 金山祐里, 土屋景子 他:理学療法士・作業療法士の社会的スキルの変化—経験年数による比較—. 作業療法おかやま 21:58-62. 2011.
- 11) 藤本 学, 大坊郁夫:コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み. パーソナリティ研究 第15巻 第3号:347-361. 2007.
- 12) 安田大典, 樽井一郎 他:総合臨床実習における情意領域に関する学生の意識変容. 日本作業療法研究学会雑誌 14(1):7-15. 2011.
- 13) 後藤 学, 大坊郁夫:大学生はどんな対人場面を苦手とし, 得意とするのか?:コミュニケーション場面に関する自由記述と社会的スキルとの関連. 対人社会心理学研究 No.3:57-63. 2003.
- 14) 飯塚一裕:大学生のコミュニケーション意識について—テキストマイニングによる分析—. 愛知教育大学研究報告 59(教育科学編):49-53. 2010.
- 15) 落合良行, 佐藤有耕:青年期における友人との付き合い方の発達的变化. 教育心理学研究 第44巻 第1号:55-65. 1996.
- 16) 宮本礼子, 川又寛徳:総合臨床実習経験を通じた作業療法学生の自己成長感を涵養する要因—Focus Group Interviewを用いた質的研究—. 日本保健科学学会誌 14(4):223-234. 2012.
- 17) 島谷康司, 沖 貞明 他:臨床実習におけるコミュニケーションスキル課題への対策. 理学療法の臨床と研究 第20号:101-108. 2011.
- 18) 森谷利香, 九津見雅美 他:看護系大学生の学習意欲とコミュニケーション能力に関する研究. 千里金蘭大学紀要 8:191-199. 2011.
- 19) 大坊郁夫:社会的スキル・トレーニングの方法序説—適応的な対人関係の構築—. 対人社会心理学研究 第3号:1-8. 2003.
- 20) 藤本 学:コミュニケーション・スキルの実践的研究に向けたENDCOREモデルの実証的・概念的検討. パーソナリティ研究 第22巻 第2号:156-167. 2013.
- 21) 大坊郁夫:コミュニケーション・スキルの重要性. 日本労働研究雑誌 No.546:13-22. 2006.

## **Difference of communication skills in the grade-based of Occupational Therapy Students**

**Saori Chiba <sup>1)</sup>, Akihiro Sato <sup>1)</sup> and Kazuhiko Asada <sup>2)</sup>**

- 1) Hirosaki University of Health and Welfare, Department of Rehabilitation Sciences, Division of Occupational Therapy, 3-18-1 Sanpinai, Hirosaki 036-8102, Japan
- 2) Hirosaki University of Health and Welfare, Department of Rehabilitation Sciences, Division of Speech-Language-Hearing Therapy, 3-18-1 Sanpinai, Hirosaki 036-8102, Japan

### **Abstract**

Because communication skills improve with experience, we thought that 3rd and 4th year students, who had been given more training, would communicate better than 1st and 2nd year students. To test this, we took as subjects 164 students who were between their 1<sup>st</sup> and 4<sup>th</sup> years in the Division of Occupational Therapy and evaluated them using ENDCOR communication skill scales. The 1st and 2nd year students still had little or no clinical training experience at the time of the test, whereas 3rd year students had undergone evaluation training twice and 4th year students had experienced evaluation training and general clinical training four times. Effective answers were obtained in 94.5% (155 of 164) of the tests. A comparison of the results showed that 3rd year students scored lower than 1st year students in “flexibility” and “empathy” and 4th year students scored significantly lower than 1st year students in “maintaining relationships”, “management systems skills” and “interpersonal skills”. In the clinical training program, explanations must be made that make it possible to put into practice a program that enables the trainees to understand the patients and to perform as therapists. However, patients differ in both age and circumstances and their mental and physical conditions also vary. It was inferred that the self-assessments of students in the upper grades were diminished as they underwent training and realized the immaturity of their skill levels when communicating with partners with whom there had been few contact opportunities. The results suggested the likelihood that there is a gap between the communication skills that are expected in the clinic and the skills the students themselves recognized in their school-learning environment.

Key words: Communication Skill, Student, Clinical Training